

小論文

（一般推薦入学）

注意事項

1. この試験問題（小論文）は学校教育課程障害児教育コース受験者用です。
2. 試験開始の合図があったらすぐに用紙の種類と枚数を確認した上で、受験番号記入欄の全てに受験番号を記入してください。
表紙 1 枚
問題並びに答案用紙 3 枚
3. 試験終了後、全ての用紙を回収します。
4. 用紙が不足していた時や、印刷が不鮮明な時には手を挙げて監督者に知らせてください。

この用紙（表紙）の裏面を「メモ用紙（構想用）」として使用しても構いません。

総計	
----	--

受験番号	
------	--

問 以下の論説についての小問に解答しなさい。

昨日、7月24日は森 毅^{つよし}（1928～2010年）先生の命日だった。森先生は京都大学・教養部（当時）の名物数学教師だった。入学すると私はさっそく彼の数学の講義を受講した。

先生はジーンズによれよれのシャツ姿で、のっそり教室にやってきて、今では考えられないことだが、よっこいしょと教卓に座るとまずタバコを一服ふかした。灰はそのまま床に。「さて、今日はなんの話しよかな、君ら、なんかおもしろいことあった？」。そんな感じで講義とも雑談ともつかない会話が始まる。出席してもしなくても単位がもらえることがわかると受講者はどんどん減っていった。

ある日、遅刻しそうになり、階段を急いで下りて教室に向かうと、下から森先生が上がってきた。「誰もおらんから、今日はやめにしよかとおもったんやけど、君が来たなら、まあ、一応やろか」。先生は芸能から哲学までなんでも知っていた。数学も、数学史や教育論を語った。入試も各教科の得点を、二乗してから足せばよい、と言っていた（そうすれば平均的な学校秀才ではなく、一芸に秀でた人を合格にできる）。

大学とは教科を学ぶ場所ではなく、むしろ大学という自由空間に棲息^{せいそく}する、奇妙な生き物が発する不思議な振動に感応する磁場だと悟った。文科省の管理が進み、大学の自由度ががんじがらめになる前の、牧歌的な日々の思い出である。

出典）福岡伸一（1959年生まれ）の動的平衡：森毅先生との日々、朝日新聞2019年7月25日付け、※一部改変あり。

1. この論説に「森毅先生との日々」とは異なる、わかりやすい見出し（タイトル）を12～15字の範囲でつけなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

↑ 12文字 ↑ 15文字

小 計	
-----	--

受験番号	
------	--

2. この論説を、100字以内で要約しなさい。

(100字)

小 計	
-----	--

3. 本学教育学部障害児教育コースへの志望動機を、「前問2の解答」と「学校教育法第83条（以下）」を引用しながら、400字以内で述べなさい。

学校教育法第83条

第1項 大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させることを目的とする。

第2項 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

受験番号	
------	--

[illegible]

(100字)

(200字)

(300字)

(400字)

小計	
----	--

受験番号	
------	--